

研究対象としての“well-being”概念への着目

— 『人生論ノート』における三木清の指摘を踏まえた教育学的課題設定—

助 川 晃 洋

I 『人生論ノート』読後感

三木清の『人生論ノート』という小さな書物がある。文庫本となり、かつては、ある年の「新潮文庫の100冊」のうちの1冊であったと記憶しているが、「同2009」の企画では、そのリストからは漏れたようだ。この本は、1941（昭和16）年に創元社から出版されるとたちまちベストセラーになった。また第二次世界大戦直後にも、黒ずんだ粗悪な紙に印刷されたひどいもので、しかもいくつかの分冊であったらしいが、それでも飛ぶように売れたと言われている。若かった頃の筆者も、かなりの背伸びをして、この本を購入した記憶がある。動機については覚えていない。しかし「読んだ」と言い切れるほどまでは付き合いきれなかったというのが正直なところである。それどころか、研究室の書棚にないところを見ると（自宅には書棚がない。そもそも並べる本がない）、とっくに処分してしまったか、或いは紛失してしまったに違いない。

この『人生論ノート』では、「懷疑について」、「習慣について」、「虚栄について」、「名誉心について」、「怒について」等々の20（初版刊行時。最終的には23）の随想が、章に分かれて並んでいる。その先頭に、いきなり「死について」（原題は「死と伝統」）と来ていて、しかも次のような書き出しで始まる⁽¹⁾。

近頃私は死といふものをそんなに恐しく思はなくなつた。年齢のせみであらう。以前はあんなに死の恐怖について考へ、また書いた私ではあるが。

思ひがけなく来る通信に黒枠のものが次第に多くなる年齢に私も達したのである。この数年の間に私は一度ならず近親の死に会つた。そして私はどんなに苦しんでゐる病人にも死の瞬間には平和が来ることを目撃した。墓に詣でても、昔のやうに陰惨な気持になることがなくなり、墓場をフリードホーフ（平和の庭—但し語原学には関係がない）と呼ぶことが感覚的な実感をぴつたり言ひ表してゐることを思ふやうになつた。

三木が「人生論ノート」を『文学界』に連載したのは、1938（昭和13）年6月から1941年10月まで、彼は1897（明治30）年1月5日の生まれだから、41歳から44歳までということになる。現在の筆者と同じか、或いは少し上といったところだ

が、いずれにせよ、それほど変わらない。しかし「死について」を読むと、その信じられないくらいの老成ぶりに（ということは、自分の精神的な成熟の遅さにも）、とにかく驚かされる。当時としては、哲学者として、それ以前に一人の大人の男性として、これが標準的な歳のとり方だったのだろうか。事実、三木は、敗戦直前の1945（昭和20）年3月に、治安維持法違反の容疑をかけられ仮保釈中だった高倉テルをかくまい、逃亡を助けた嫌疑で検挙され、はじめは巣鴨の東京拘置所に拘留され、次いで中野の豊多摩刑務所に移されたが、劣悪な衛生状態の中で過酷な取り扱いを受け、戦後の9月26日に48歳で獄死している。その時点で、『三木清全集』全20巻（岩波書店）を埋めるほどのものを書いてしまっているのだから、「人生論ノート」連載時の三木は、もう「晩年」と言ってよいほどの年齢になっていたということなのかもしれない。

『人生論ノート』に接して驚かされるのは、三木の老成ぶり、ただそれだけではない。いわゆる警句集の形をとったものが多いのだが、見事なレトリックで綴られたアフォリズムの一つ一つが確信に満ちていて、この年齢でよくぞここまで断定的な物言いができるものだ、ただただ感心させられる。『全集』第1巻の解説者である榎田啓三郎は、同書「後記」の中で、「『人生論ノート』は幾度か版を重ね、戦中戦後を通じて実に驚くべき多数の読者を持ち、いまなお広く愛読されつつある。非凡な筆になる処世智の美しい断章が読者の嗜好に投じたということもあるであろうが、しかし何よりも著者みずからの主体的自覚の深さが人の心に訴えるものを多分に含んでいるからであろう」⁽²⁾と書いている。おそらくは、その通りなのだろう。

また例えば「健康について」には、次のような一節がある⁽³⁾。

「健康そのものといふものはない」、とニーチェはいつた。これは科学的判断ではなく、ニーチェの哲学を表明したものにほかならぬ。「何が一般に病気であるかは、医者判断よりも患者の判断及びそれぞれの文化圏の支配的な見解に依存してゐる」、とカール・ヤスペルスはいふ。そして彼の考へるやうに、病気や健康は存在判断でなくて価値判断であるとするれば、それは哲学に属することにならう。経験的な存在概念としては平均といふものを持ち出すほかない。しかしながら平均的な健康といふものによつては人それぞれに個性的な健康について何等本質的なものを把握することができぬ。もしまた健康は目的論的概念であるとするれば、そのことによつてまさにそれは科学の範囲を脱することになるであらう。

『人生論ノート』は、大の読書家であったと伝えられる三木のものにふさわしく、ある

ときは適度に、またあるときはいささか過剰なまでにペダンティックであり、これもまた、一つの魅力となっている。たとえ年齢的に近いとはいえ、いまの筆者に、このような文章は書けそうもない（これからも書けないだろう）。どう考えても、これほどの術学癖はないし、それだけの学殖もない。

II 三木清の人柄

戦前、そしておそらく戦中もそうであったと思われるが、旧制高校生には、必読だとされる一群の本があった。西田幾多郎の『善の研究』、阿部次郎の『三太郎の日記』、倉田百三の『愛と認識との出発』、出隆の『哲学以前』等がそれであり、ここにおそらくは三木の『人生論ノート』も加わるのだろう。しかし戦中戦後の生きるか死ぬかの切羽詰まった気分の中では、これらの教養書から、どこかいい気なエリートの自己陶醉のようなものが共通に感じられ、それだけに一般には不評だった。さらにこの時期、エリート意識をとどめた戦前教養主義に対する戦後実存主義の反発もあったであろう。この頃から、これらの本は、必読書という資格を急速に失っていく。1968（昭和43）年生まれの筆者が、そのうちの何冊かを讀んだり、読みかけたりしたものの、さっぱり共感できなかったのは、当然と言えば当然だったのかもしれない（と、つい甘えてしまいたくなる）。もっとも筆者の場合、その難解さの前にあっさり而降参しただけで、あまりにも無知であったために、そこから教養主義の匂いすら嗅ぎ取れなかったのであるが。

ただ三木の『人生論ノート』について言えば、それが読まれなくなった原因は、三木の世代と戦後世代との生きる姿勢の決定的な違い、ただそれだけではないようだ。1950（昭和25）年に今日出海が、『新潮』2月号誌上で「三木清における人間の研究」という暴露小説を書いたことが、それに追い討ちをかけている。1941年12月の（当時の呼び名で）「大東亜戦争」開戦直後、国家総動員法によって徴用された今は、尾崎士郎や石坂洋次郎とともに、陸軍報道班員としてフィリピンのマニラに滞在していた。そこにしばらく遅れて、第二次要員として火野葦平や三木がやって来る。それから9ヶ月ほどの間の、周囲を辟易させてやまない三木のすさまじい言動を綴った実名小説、それが、上述した「三木清における人間の研究」である。この表題が、三木の処女作『パスカルに於ける人間の研究』をもじったものであることは、もはや言うまでもないだろう。そして今の言う通りであるとすれば、三木の人柄の悪さは相当なものである。

マニラの仲間内では、茫漠として掴み所のない尾崎に人気が集まっていた。これに嫉妬した三木は、あらゆる術策を弄して尾崎を陥れようとする。これが誰の眼にも見え、三木

はますます孤立を深めていく。「彼は孤独と猜疑と嫉妬に狂はんばかりであつたらう」⁽⁴⁾と今は見ている。さらに今は、『人生論ノート』の中の「嫉妬について」から、次のくだりを引用している⁽⁵⁾。

どのやうな情念でも、天真爛漫に現はれる場合、つねに或い美しさをもつてゐる。しかるに嫉妬には天真爛漫といふことがない。愛と嫉妬とは、種々の点で似たところがあるが、先づこの一点で全く違つてゐる。即ち愛は純粹であり得るに反して、嫉妬はつねに陰険である。それは子供の嫉妬においてすらさうである。

愛と嫉妬とはあらゆる情念のうち最も術策的である。それらは他の情念に比して遙かに持続的な性質のものであり、従つてそこに理智の術策が入つてくることができる。また逆に理智の術策によつてそれらの情念は持続性を増すのである。如何なる情念も愛と嫉妬とほど人間を苦しめない、なぜなら他の情念はそれほど持続的でないから。この苦しみの中からあらゆる術策が生れてくる。

そして今は、次のように意地の悪い結論を引き出している⁽⁶⁾。

これだけ嫉妬を分析したのは彼の理智の戯れではない。彼は自己の抜き難い嫉妬の情念にどれだけ苦しんだらう。若い時分に友人と恋を争つて破れた時から、嫉妬は情念ではなく本能となつてゐたかも知れぬ。この苦しみをこれほど解析する三木の理智と本能の相剋は凡人の堪え得るものではあるまい。

梶田の言う「主体的自覚の深さ」というのも、自分のことをよくわかっているという意味であろうから、案外このあたりのことを指しているのかもしれない。

もっとも三木の人柄を公然と誹謗したのは、今が最初というわけではない。もっと驚くべき人間が、それを堂々と、しかも一般には不謹慎、或いはタブーとされるようなタイミングでやってのけている。

三木の一周忌に当たる1946（昭和21）年の秋に、岩波書店の雑誌『世界』が、11月号で「三木清を憶ふ」という小特集を組み、生前三木と公私ともに最も親しかったと思われた波多野精一、小林勇、林達夫に原稿執筆を依頼した。それに応えて、波多野は「三木清君について」を（「編輯者まへがき」によれば、そもそもは、三木の『構想力の論理第二』の跋文として書かれたもので、波多野の許可を得て転載の運びとなった⁽⁷⁾）、小林は「孤独のひとー三木さんの一周忌に」を、林は「三木清の思ひ出」を書いたが、特に林のこの文章は、いわゆる追悼文としては極めて異例なものであった。林は三木と同一

年、アメリカで育ったりしたために少し遅れて、旧制第一高等学校でも京都帝国大学文学部哲学科でも三木の後輩であった。それでも京都時代に始まった二人の親交は、彼らが東京に移ってから不即不離といった形でずっと続いていたと思われていた。

ところが「三木清の思ひ出」において林は、「若い時代の三木清ほど心から名声に執着し、野心に燃えてみた人間を私は見たことがない。これは彼が自分の力量と使命とについていただいてきた強烈な自信の程によるものであつた」と述べた上で、「私が若き三木清に看たたびひとつの純真さの状態は、逆説めくが彼が名声欲と野心とに駆られてゐる瞬間に在つた」と続ける⁽⁸⁾。また三木の「頗る奇怪だが、またそのどこにもふざけたところ、あてこみどころのない、しかもそれでゐて翩々たる才気と中々ぬけ目のない計画をもつてみるとでもいひたい書風」に触れた後、「三木清の純然たる独創は、彼の手のつけたあらゆる一切の分野を通じてこの怪奇な書風たゞ一つであつたと私は今でも思つてゐる」と言う⁽⁹⁾。林の文章は、三木をほぼ全面的に否定するものであり、当時も、その後も様々な物議を醸したと聞いている。

いずれにせよ、三木の人柄が、彼の身近にいた者にやり切れない思いをさせるものであつたことだけは、どうやら確かなようだ。したがって『人生論ノート』は、性格に問題がある人物が書いた人生論であつて読むに値しないということになるのか、或いはそのような性格の人だからこそ、波瀾万丈な人生を送っているはずであり、人一倍味わいのある人生論が書けるということになるのか、ただ凡庸なだけの筆者には、見分けることなど到底できるはずがない。

Ⅲ “well-being” 研究の必要性和本プロジェクトの内容

これまで三木の『人生論ノート』をめぐる、いささか散漫な議論を展開してきた。しかも話が、どうも横道に逸れ過ぎてしまったようである。このあたりで軌道を修正して主題への接近を試み、本稿に与えられた本報告書巻頭論文としての責めを果たしておこう。

三木の『人生論ノート』の中に「幸福について」（原題は「個性と幸福」）という章がある。その冒頭の二段落は、次のようなものである⁽¹⁰⁾。

今日の人間は幸福について殆ど考へないやうである。試みに近年現はれた倫理学書、とりわけ我が国で書かれた倫理の本を開いて見たまへ。只の一個所も幸福の問題を取扱つてゐない書物を発見することは諸君にとつて甚だ容易であらう。かやうな書物を倫理の本と信じてよいのかどうか、その著者を倫理学者と認めるべきであるのかどうか、私にはわからない。疑ひなく確かなことは、過去のすべての時代においてつねに

幸福が倫理の中心問題であつたといふことである。ギリシアの古典的な倫理学がさうであつたし、ストアの厳粛主義の如きも幸福のために節欲を説いたのであり、キリスト教においても、アウグスティヌスやパスカルなどは、人間はどこまでも幸福を求めるといふ事実を根本として彼等の宗教論や倫理学を出立したのである。幸福について考へないことは今日の人間の特徴である。現代における倫理の混乱は種々に論じられてゐるが、倫理の本から幸福論が喪失したといふことはこの混乱を代表する事実である。新たに幸福論が設定されるまでは倫理の混乱は救はれないであらう。

幸福について考へることはすでに一つの、恐らく最大の、不幸の兆しであるといはれるかも知れない。健全な胃をもつてゐる者が胃の存在を感じないやうに、幸福である者は幸福について考へないといはれるであらう。しかしながら今日の人間は果して幸福であるために幸福について考へないのであるか。むしろ我々の時代は人々に幸福について考へる気力をさへ失はせてしまつたほど不幸なのではあるまいか。幸福を語る事がすでに何か不道德なことであるかのやうに感じられるほど今の世の中は不幸に充ちてゐるのではあるまいか。しかしながら幸福を知らない者に不幸の何であるかが理解されるであらうか。今日の人間もあらゆる場合にいはば本能的に幸福を求めてゐるに相違ない。しかも今日の人間は自意識の過剰に苦しむともいはれてゐる。その極めて自意識的な人間が幸福については殆ど考へないのである。これが現代の精神的状況の性格であり、これが現代人の不幸を特徴付けてゐる。

このように三木が説いてから、すでにかかなりの年月が経過している。いまでも通俗的な人生論や心理学（果たしてこのやうに呼んでよいのかどうか）の書物が陸続と発表され、マスメディアでは、「幸福」や「幸せ」をめぐる言説や映像が大量に生産・消費され続け、政治や経済の分野でも、「福祉」の見直しや「豊かな暮らし」の問い直しが叫ばれている。しかし肝心の倫理学の世界では、「幸福」の問題が正面切って論じられる動きは、三木の時代と同様に、現在も乏しいままであるやうに思われる。ただしこのような問題状況の克服は、倫理学者に手に委ねられるべきであつて、本プロジェクトが関与し得るものではない。そして倫理学界ですらそうなのであるから、筆者の属する教育学界での議論の状況については、先行研究のレビューという本来不可欠な手続きを経るまでもなく、もはや言わずもがなであろうと容易に推測される。

こうしたギャップを埋めるためにも、「幸福」、「福祉」、「よい暮らし」等を含めた“well-being”概念に注目し、これを教育学の観点から再考する作業が必要なのではな

いか。本プロジェクトは、こうした問題意識に発したものである。そして研究の基本的なねらいは、教育学の立場から“well-being”の概念を多角的かつ総合的に解明することを通じて、「よりよき生」、「よりよく生きること」の内実を吟味するとともに、そこで得られた知見が、学校現場での教育実践にどれほど適用可能であるかを追究するところに絞られている。こうした研究のねらいは、現実的な諸条件から相当程度の制約を受けることで変形してしまっているが、それでも本プロジェクトの「申請書」の「プロジェクトの内容」欄において、趣旨としてはほぼ同様に、記述としてはより具体的に表現されている。次の通りである。

＜概要＞高度に情報化され流動化する社会の中で“well-being”（よりよき生）を求めて生きる人間の生涯を研究対象とするという姿勢が、今日の、そして今後の教育・社会・文化科学には求められている。このような考えの下で本研究は、とりわけ児童・生徒の現状に目を向ける。なぜなら彼らは、独特の生きにくさ（自己肯定感の欠如、自己実現の困難さ）を抱えながら、それでもより人間らしく生きることが求めているはずだからであり、さらに学校と教師もまた、その支援に尽力していると考えられるからである。そこで本研究では、児童・生徒の“well-being”の実現に資する教育実践のあり方を検討するとともに、その理論的基礎を整備することにしたい。（以下省略）

＜実施計画・方法＞本研究の課題は、次の三点である。①“well-being”に関する研究動向を把握する。特に概念規定をめぐるでは非常に混乱している状況があるので、そのエッセンスを抽出し、より本質的な理解を試みたい。②教育学分野において“well-being”の問題がどのように取り扱われてきたかを把握するために、「生きること」の教育学の歴史的展開過程を追跡する。人間の歴史、そして教育学の歴史は、限られた命をどう生きるかを考えねばならない人間の宿命に向かって、その意味、すなわち「人間として生きること」の意味を考えてきている。③児童・生徒の“well-being”の実現に資する教育実践のあり方について、実際の授業実践事例に基づいて考察する。その際に宮崎県小林市における「生き方科」としての「こすもす科」と芸術系教科（音楽、図画工作・美術）に着目する。前者は、「生きること」それ自体を取り扱うものだからであり、後者は、児童・生徒の文化的諸能力の向上や文化にかかわる価値観形成への寄与が濃厚であるとみなされるという点で、本研究の趣旨に適合しているからである。

＜期待される成果＞成果として、次の二点が期待される。①「生きる力」の育成を標

榜する現代の我が国の教育改革に対して表面的な迎合にとどまることなく、より根本的なレベルで共鳴したり、或いは問題提起したりするような学術的知見が導出される。同様の先行研究の存在は確認されておらず、本研究は萌芽的な試みとみなされ得る。②

“well-being”の問題が学部構成員に共通する関心事の一つとして議論され、全学の研究戦略上の位置づけが模索される今日状況において、本研究は先導的な取り組みとして位置づけられるはずであり、このような意味において今後の学部内共同研究の活発化に貢献するものと思われる。

IV “well-being” 研究の意義と問題点

誤解を恐れずに言えば、今日の我が国において「生きること」は、極めて自明のことであって、「生きること」そのものに不安を抱いたり、また疑問を差し挟んだりするようなことはなく、ただただその日常において、人は、ひたすらなまでに、さらによい「生き方」を求めるものでしかないように思える（一方で、これに当てはまらない事例に事欠かないことは、筆者も重々承知している）。しかし歴史は、確実に、人間に試練を強いる。その試練が、思想家や教育者達に、自らに続く後代の者達への限りない不安を媒介させ、教育意識を鮮明にさせる。やがて250年前にもなろうとする1762年の段階で、ルソー（Jean-Jacques Rousseau）が『エミール』で、「生きること、それがわたしの生徒に教えたいと思っている職業だ」⁽¹¹⁾と言ったとき、「生きること」の難しさ、そしてそれ以上に「生きること」を教えることの難しさが、そこには含意されている。そしてその難しさは、いまでも全く変わっていない。21世紀を迎えてなお、「生きること」が、教育の原理そのものを求め、教育学には、「生きること」の主題化が求められているのだ。その限りにおいて、研究対象としての“well-being”概念への着目は、歴史的にも、現代的にも、その意義が認められ、正当化されることになる。

なお最後に一言付け加えておきたい。現代社会において共有されている幸福「観」と幸福「感」の多くは、それぞれ、それを抱いている人自身が深くコミットしている立場・態度に照らしても、実は問題含みである。しかしこの実感について、客観的かつ説得的に論ずることはかなり難しい。我々教育学研究者の側には、“well-being”にかかわる情緒と言葉を研ぎ澄ませるためのモラリスト的考察が、そもそも決定的に不足している。換言すれば、「生」を物語るという視点が鍛え上げられていない。この問題点にかかわっての努力こそが、今後において、まずは必要であろう。

注

- (1) 三木清 『人生論ノート』 創元社 1941 (昭和16) 年 pp. 3-4.
- (2) 梶田啓三郎 「後記」 三木清 『三木清全集』第1巻 岩波書店 1966 (昭和41) 年 p. 497.
- (3) (1) と同じ pp. 154-155.
- (4) 今日出海 「三木清における人間の研究」 『新潮』昭和25年2月号 (第47巻第2号) 新潮社 1950 (昭和25) 年2月 p. 49.
- (5) (1) と同じ pp. 107-108.
- (6) (4) と同じ p. 49.
- (7) 波多野精一 「三木清君について」 『世界』昭和21年11月号 (第11号) 岩波書店 1946 (昭和21) 年11月 p. 99.
- (8) 林達夫 「三木清の思ひ出」 『世界』昭和21年11月号 (第11号) 岩波書店 1946 (昭和21) 年11月 pp. 112-113.
- (9) 同上 p. 113.
- (10) (1) と同じ pp. 17-19.
- (11) ルソー著 今野一雄訳 『エミール (上)』 岩波書店 1962 (昭和37) 年 p. 31.